［パルテノン研究ノート］

ヘファイストス神殿との相互関係（メトープ）

福部信敏

現在に残されたものとしてのパルテノンには、ギリシア神殿の正規のオーダーでは説明できない建築部材が、一目瞭然、厳然として残存している。西側オピストドモスのファサードの上方、現在のフリーズの下縁に沿って、タイニアを隔てて、計十一個のレギュラが付着している。破壊されている東側プロナオスのファサードも同様だったと考えられる（図1）。これらレギュラはドーリス式オーダーのドーリス式フリーズ、すなわちメトープ・トリグリフ・フリーズのうちのトリグリフの下に必ず付着していなければならない、機能的にも美的にも不可欠な、六個の露玉グッタを持つ石板である。しかるに我々がそこに見るのはイオニア式フリーズ、あの有名な連続浮彫のパルテノン・フリーズなのである。現状の組み合わせが機能的にも美的にもなんの意味をも持っていない故に、当初の計画の段階において両オーダーを融合させようとした意図があったとは考えられない。

周知の事実でありながら、この矛盾が論じられることは稀であり、言及されたとしても、パルテノンの建造工程における建築上の話題の域を出ないように思われる。そうした状況の中で、メトープそのものを中心に据えた彫刻論の立場から、この矛盾を解決すべく一つの仮説を提示したのが水田徹氏である［「パルテノン南メトープ、ケンタウロマキー図の原形と現状」『美術史学』東北大学美学美術史研究室、第五号、一九八三、四九―七四頁］。

パルテノンの南メトープ全三二枚は、「カレーの素描」を参考にすると、すべての図像とその順序が明らかになる。いまだに主題不明の中央部分、no. 13からno. 20までの八枚の両

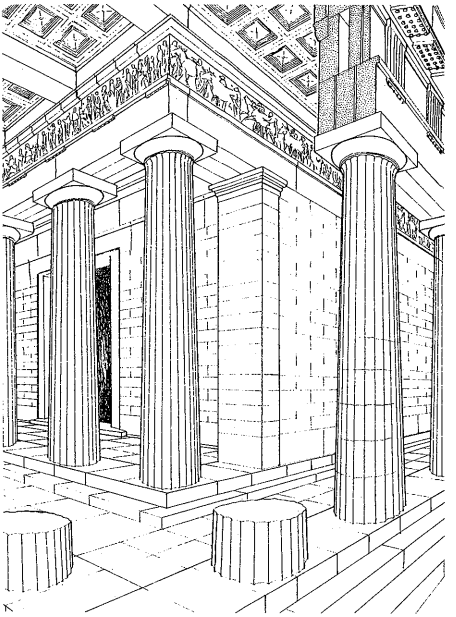


図1　パルテノン内陣外壁北東隅復原図

側に、ケンタウロマキアを主題にした各々一二枚が均等に配置されている。氏は後者の二十四枚に着目、それらを様式論によって配置換えした上で、再度二つのグループに分割した（図2）。その上で、それらのグループが本来は内陣の東西外壁、すなわち冒頭で述べた問題の場所のために作られたものと推論した。その際、ファサードは各々、五柱間一〇枚のメトープしか許容しないため、各々のグループの両端各一枚を南北の外壁に振り分けた。かくて、東側のグループは、「カレーの素描」番号で、nos. 2, 3, 4, 5, 7, 27, 28, 29, 30, 31の一〇枚と、南北側に振り分けられた各々no. 1およびno. 32。西側のグループはnos. 8, 9, 10, 11, 12, 21, 22, 23, 24, 25の十枚と、南北側の各々no. 26とno. 6

氏が配置換えの根拠とした様式論は氏とか筆者の意見を越えた共通理解を待たなければならないから暫く差し控えるとしても、氏の考え方の根底には無視できない問題が潜んでいるように思われる。氏の説は既にDie Kentauromachie-Metopen des Parthenon: Ihr jetziger Zustand und die ursprünglich geplante Anordnungとして Ernst Wergerによって紹介されている[Der Parthenon in Basel : Dokumentation zu den Metopen, 1986, p. 80]。そこでWergerは"Der Verfasser übernimmt im Prinzip die Hypothese von Wesenberg und bezieht sich auf dessen Referat am Parthenonkongress."「筆者（水田徹）は原則的にWesenbergの仮説を引き継いでおり、パルテノン・コングレスにおける彼の報告講演を引用している」と述べている。しかし、筆者未見のB.Wesenberg [Die Datierung der Südmetopen, in Internationaler Parthenon-Kongress, Basel, : Programm 29 (Kurzfassung)]について水田氏は次のように紹介している。「（Wesenbergは）南メトープの様式的不統一は、本来内陣外壁用に作られた面と、南ペリスタシス外壁への移設に際して新たに付け足された面が混在している故であり、この移設の原因は建築開始後に内陣外壁はフリーズで飾ることに計画変更されたことにある、とする。ただし少なくともその口頭発

表においては、新たに付け足されたのが具体的にどの面であるか、また新旧メトープ面が各々いかなる配列順であったか、については一切言及されていない。」[六二頁、注二八]

しかしながら、非常に啓発的な氏の推論もさらに検討を要する幾つかの課題を含んでいるように思われる。その第一は、現状のパルテノンの内陣の南北面外壁にはレギュラの痕跡が全く存在しない（図1）。確かに水田氏のように二四枚という数に余り固執しないで、先のWesenbergのように「移設に際して付け足された」としてもよいのではないか。しかし、これには、後に触れるJ. A. Bundgaard [Parthenon and the Mycenaean City on the Heights, 1976]の次のような指摘もあって、そう簡単な問題ではない、"As appears from these ashlars this does not preclude that the original Doric frieze incl. regulae continued all around the building." [同著、p.181, n.160] その場合、南北面の左右両端にトリグリフ・メトープ・トリグリフのセットが一つだけ置かれたということではなくなるから、これに氏の理論を適用すれば、ちょうどヘファイストス神殿（口絵参照）のペリスタシス、すなわち周柱廊の外側南北面にその類例を見るように（図3）、全体に亙ってドーリス式フリーズが施され、両端以外は無装飾の石板メトープが組み込まれていたと考えるのが穏当であろう。

第二に、前四四七年の現パルテノンの建造開始後暫くして内陣外壁の装飾がメトープからフリーズに計画変更されたとすれば、水田氏は明言を控えておられるが、移設の対象となったメトープ群が一番最初に制作されたと考えるのが自然であろう。ただ、ギリシア神殿の一般的な建造工程に関してだが、筆者の知る限り、ペリスタシス外壁から内陣へと進むのが通例だと思う。もしそうだとすれば、内陣に係わるメトープがすべて完成されていた段階で、ペリスタシス外壁の東西南北四面、少なくとも東西北三面のメトープ群は既に存在していなければならないはずである。しかし、それはそうではなく、建造工程に関する筆者の認識の方が誤りで、パルテノンにあっては、内陣が先に、あるいはペリスタシス外壁と同時に作られつつあったのであろうか。あるいは、メトープ全体は、そのような神殿の建造工程とはあまり関連をもたずに、アトリエで適宜に制作されていったのであろうか。また、それと関連して、なぜケンタウロマキア・メトープ群が北長側面ではなく、南長側面に齎されたのか。様式的に古い代用の作品ということで、あまりひとの眼に触れない南側が選ばれたのであろうか。しかし、この問題についてももはや判断する術を我々は失っている。出来得る唯一のことは、南面のそれを中心にして、現存のメトープ群全体の様式論を徹底して行う以外にない。本当にケンタウロス・メトープ群は

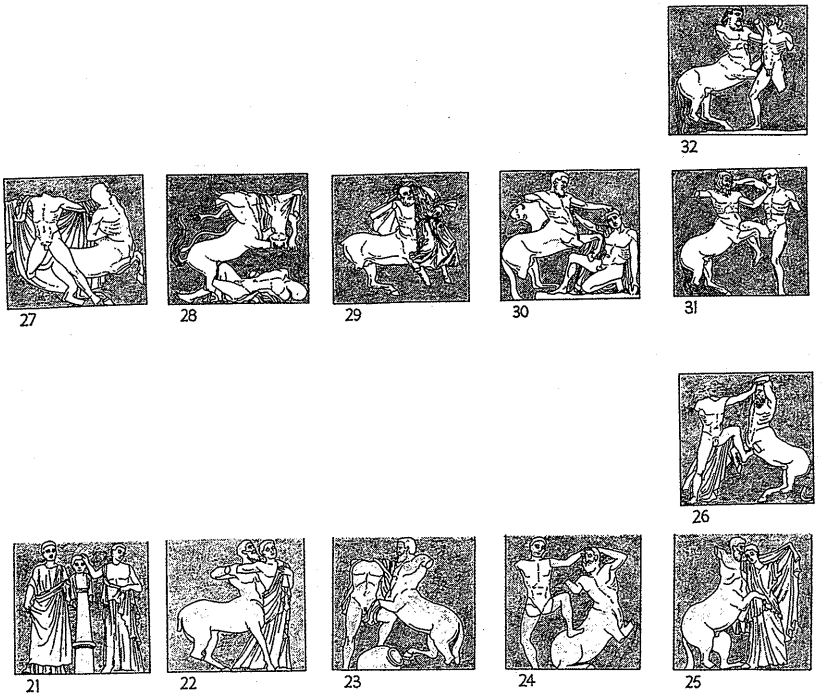
最古の様式であるのかどうか。

さて、第三に、水田氏やWesenbergは計画変更や移設があったとしても、その年代をパルテノンの建造が開始された前四四七年以後のいずれかの年に置いているが、全くそれを無視して、問題の内陣壁およびその年代をずっと前に引き上げる考え方がある。すなわち、Bundgaardで、彼の考え方は基本的には現在のパルテノンの他にもうひとつの前身の神殿を仮定する幾人かの研究者の立場に立っている。

Bundgaardの考え方は独特なもので、プルタルコスが『ペリクレス伝』で伝えているパルテノンの建築家カッリクラテスとイクティノスを“The two architects have not worked together, but Ictinus replaced Callicrates in 447”[p. 67]と、完全に切り離すと同時に、現在のパルテノン（彼の第二パルテノン）をイクティノスに、その前身（彼の第一パルテノン）をカッリクラテスに帰している。そして第一パルテノンは第二のそれの建造が開始される一〇年前の前四五八／七年頃に着手されたとする。従って問題のタイニアとレギュラ群はプロナオスとオピストドモスのファサードをドーリス式オーダーで計画した第一パルテノンのアーキトレイヴの残痕ということになる。Bundgaardはメトープそのものには言及していないが、ここで彼の学説が彫刻史に重大な意味を持ってくるのは、もし彼の仮説が正しくて内陣の壁の制作年代が前に移動すれば、当然それに伴って水田理論の制作年代も動いてしまうからである。水田氏が「ここに我々の二分割案による二四面のメトープをはめ込むつもりだったのではないか」と考えている「ここ」が全く異なる年代のものになってしまうのである。すなわち、今まさに問題になっている二四枚のパルテノンの南メトープの制作年代は前四五八／七年以後、前四四七年以前の一〇年間ということになってしまう。この論理が正しければ、パルテノン・メトープが前四四七年以後の五年間に制作されたという定説が覆えされることになる。

この第三の問題は前五世紀中葉の彫刻史に大きな課題を投げかけることになり、ケンタウロマキア・メトープの様式を古様、すなわち、もしかしたら前四四七年より早いのではないかとすら考える筆者にとっても、関心を抱かないわけにいかない。具体的には、ヘファイストス神殿のメトープ群との比較検討という作業を意味するが、その場合、単なる白紙の状態での作品のぶつけあいではなく、一つの有意義な問題提起の上に立ったことになる。いわば土俵が準備されたことになる。そこに移るまえに、もう一つ触れておかねばならない学説がある。

パルテノンの歴史は普通、前四九〇年代に「古」ないし「旧パルテノン」が建設されはじめたが（William Bell



Dinsmoorによれば土台は前四九五年かそれより二、三年後[The Date of the Older Parthenon, AJA XXXVII (1934)]、デモステネスによれば神殿は前四九〇年のマラトンの戦利品による、XXII f,13)、ペルシア人による前四八〇年の焼打ちによって破壊、以後現在のパルテノンが前四四七年に着手されるまで再建されることはなかったとされる。そうしたなかで、それをパルテノンの前身と呼ぶか、第一パルテノンと呼ぶかはともかく、現在のパルテノンが二つの段階を経て、すなわち前身ないし第一パルテノンが一度建て直されて完成されたと考える研究者たちがいる。Rhys Carpenterはその代表的なひとりである[The Architects of the Parthenon, 1970 松島道也氏の邦訳あり]。Bundgaardと同じくカッリクラテスによる前身の神殿を仮定し、それを「キモンのパルテノン」とよんだ。キモンの政権下、主に前四六六年のエウリュメドン河の戦闘の戦利品を売却した資金で建立されはじめたとされるもので、現在の「ペリクレスのパルテノン」は可能な限りその「キモンのパルテノン」の建築部材を再利用して作られた

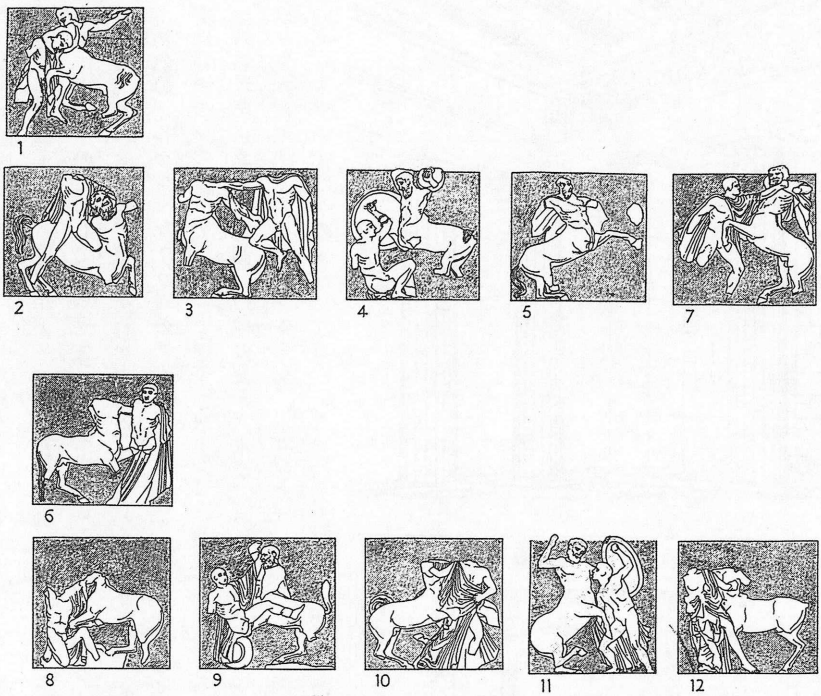
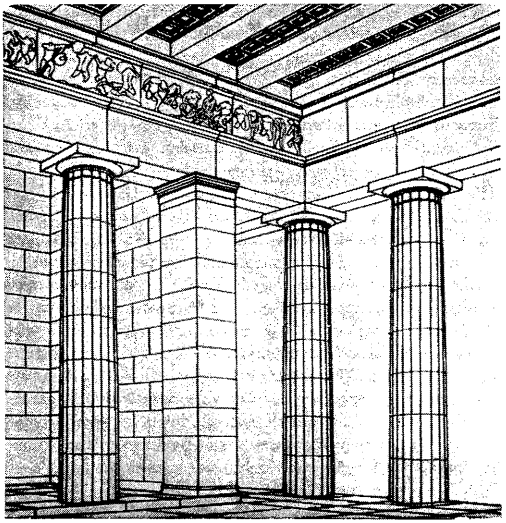


図2　配置換えされたケンタウロマキア・メトープ群（数字は「カレーの素描」番号）
上段――東側グループ（水田徹氏の第一分割区）
下段――西側グループ（水田徹氏の第二分割区）

図3　ヘファイストス神殿
ペリスタシスの外側北東隅

とされる。水田氏がケンタウロマキア・メトープの元の場所を、先に述べたように、現パルテノンの最初の計画に際してのの内陣に求めるのに対して、Carpenterは「キモンのパルテノン」のペリスタシス外壁にそれを求める。すなわち今日大英博物館のエルギン・マーブルのケンタウロマキア・メトープ群は「キモンのパルテノン」に由来するものであると。「キモンのパルテノン」の長側面の柱の数一六本が、パルテノンでは一七本に増えるものの、メトープ・トリグリフ・フリーズのメトープの幅は次のようになるという、「キモンの円柱間隔スパンは、ペリクレスの建物では約一一・五cmだけ狭くされていたから、(キモンのトリグリフがそれに準じて幅狭くされたり、新しいものに取り替えられたりしなかったと仮定して)古い建物のメトープはいずれもあとの建物に対しては、狭くなった長さの半分、すなわち五・七cmだけ大き過ぎることになったであろう」、そして「大英博物館を訪れメトープを調べるひとは、それらの半数以上がその片方または両方の端の切口をぞんざいに切られていることに気がつくであろう」[松島訳]と語っている。



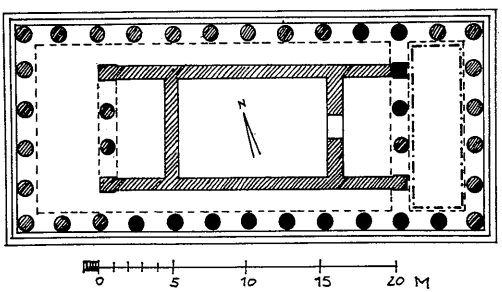
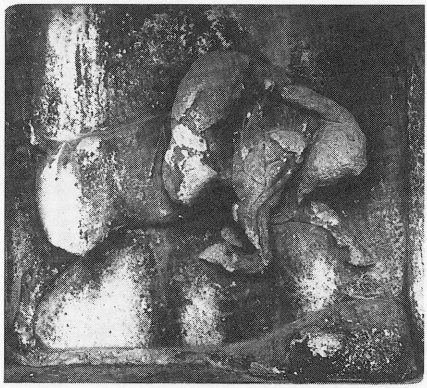


図4　ヘファイトス神殿東プテマロ北西隅説明図と神殿プラン

Bundgaardに加えて、Carpenterによって筆者はパルテノンとヘファイストス神殿のメトープの様式比較に対して、いわば土俵がもう一つ準備されたことになる。しかし、そこに立ってみると、筆者の固定概念と相反する仮説と向かい合わねばならないことに気が付く。筆者の様式史の概念では、パルテノンのメトープがいくら古くてもヘファイストス神殿のそれより古くなることは決してあるまい、ということである。ヘファイストス神殿の建設の開始年代に関しては、異説はあるものの

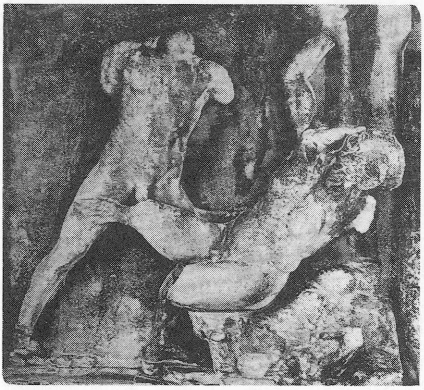
前四五〇年頃、Dinsmoorによれば前四四九年、当のCarpenterによれば前四四八年ということになる。従って、これらの定説を前提とする限り、先に述べたようなBundgaardに基づく仮説に立っても、Carpenterのそれに立っても、必然的にパルテノンのメトープの方がヘファイストス神殿のメトープに先立ってしまう。それは筆者の本意ではない。これを筆者の固定概念と整合させるただ一つの解決法は学説で成り立っているヘファイストス神殿の建立開始の年代を引き上げることである。そして両神殿のメトープの制作年代を同時か、ヘファイストス神殿からパルテノンへと逆転させることである。Angelos Delivorriasは、ヘファイストス神殿の彫刻研究から神殿全体の年代を引き上げざるを得ないといっている[Attische Giebelskulpturen und Akrotere des Fünften Jahrhunderts, 1974, pp. 16－60]しかし、それは牽強付会ということであろうか。いずれにせよ、パルテノン・メトープ前四四七年の土俵に登ると、ヘファイストス神殿の様式論と前四四七年とによって前後から圧迫されて、筆者はその土俵からはみ出されてしまうような自分を感じる。

ヘファイストス神殿ペリスタシスの外側南北両面にはそれぞれ一二の柱間に二四枚のメトープが組み込まれているが、全く変則的に、南北両面共、東寄りの四枚のみに浮彫装飾が施されているだけである（図3）。なぜ各四枚かの問題に関しては様々な意見があり、資金不足とするもの、積極的に東プテロマを部屋と見立てて（ヘファイストス神殿では東プロナオスのファサードのフリーズが南北のプテロマを越えて外側の列柱まで延び、いわば一つの閉ざされた空間をつくっている、図4）、内部と外部との整合性をみとめる立場[Heiner Knell ; Mythos und Polis, 1990]、さらには、それを全く否定する立場[Florens Felten ; Griechische tektonische Friese archaischer und klassischer Zeit, 1984]などがある。南面の四枚（図5）は向かって左から、no.1―ペリフェテス、no.2―シニス、no.3―マラトンの牡牛、no.4―ミノタウロス、そして北面の四枚（図6）は向って右から、no.1―クロミュオンの牝猪、no.2―スケイロン、no.3―ケルキュオン、no.4―プロクルステスである［北面のnos.と主題はHerbert Koch ; Studien zum Theseumstempel in Athen, 1955による］。これら「テセウスの勲」の主題に関しては殆ど問題はなく、ただ一つプルタルコス『テセウス伝』などが伝えるトロイゼンからアテナイに至る道中での彼の勲の順序との整合性から主題を取り替える場合がある。東メトープ一〇枚の主題は「ヘラクレスの一二の難業」であるが、特徴的なのは、nos.8と9二枚を使って「ゲリュオン」に当て、「ステュンファロスの猛禽」、「クレタの牡牛」、「アイゲウスの厩」の三主題が省略されている。ヘファイストス神殿のメトープ群は欠損が甚だし

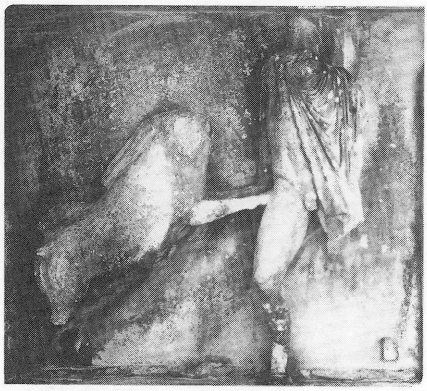


no. 3　マラトンの牡牛

no. 4　ミノタウロス



no. 2　スケイロン

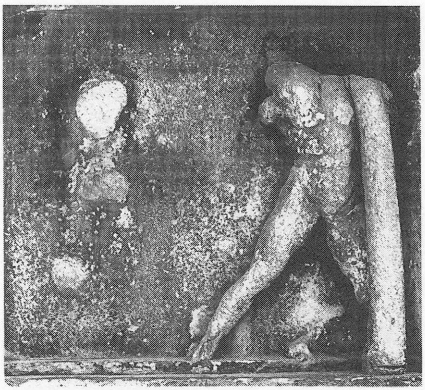


no. 1　クロミュオンの牝猪

い上に、風雨に晒されて赤茶色の汚れに覆われているため、詳細な様式比較には耐えない。従って、内陣を飾る東西のフリーズ群にはJosé Dörigの書物で見るような素晴しい写真図版があるのに対して[La Frise de l'Éphaisteion, 1985]、メトープ群にはそのようなものは望むべくもない。しかも、東メトープは特に酷い欠損状態にある。

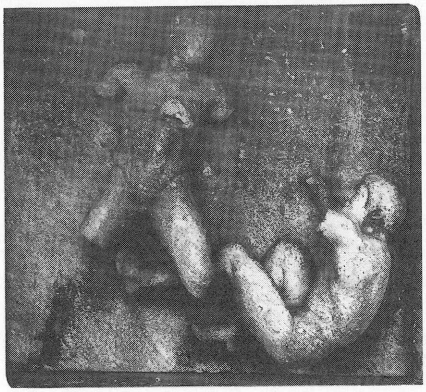
そのような理由によって、パルテノン・メトープとの様式比較といっても、形象の身振りや大まかな形態把握といった見誤ることのない観点だけを対象に選ばなければならない。ヘファイストス神殿では、無論比較的にということだが、いまだに人物像をその平面性において捉えようとする傾向が著しい。南のnos.2, 4,北のnos.1, 2, 4,などは皆その例といえよう。さ

no. 1　ペリフェテス

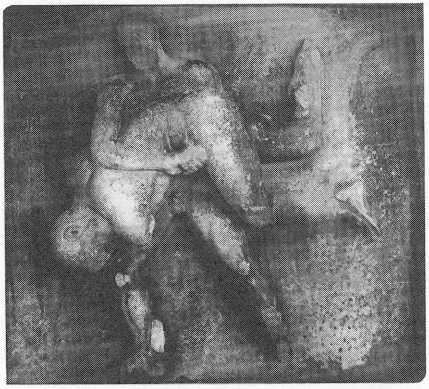


no. 2　シニス

図5　ヘファイストス神殿南メトープ（写真は神殿に設置された現状順　西←→東）



no. 4　プロクルステス



no. 3　ケルキュオン

図6　ヘファイストス神殿北メトープ（写真は神殿に設置された現状順　東←→西）

らに、それらの人物像のうちに、片足を前に踏み出した同じポーズが幾回となく繰り返されているのが見てとれる。強い平面性はまた純粋な側面性と調和して、その整合性を獲得する。ヘファイストス神殿の彫像には、パルテノンのそれがもつ微妙な七分三分のものの見方が少ないように思われる。例えば、後者の南メトープno.9（図7）において、壺に腰をとられて仰向けにのけ反ろうとしているラピタイ人は明らかに七分三分視になっているが、同じポーズを前者が表現しようとした場合、北no.2のスケイロンの様に無理に平面性を強調するか、北no.4のプロクルステスの様に完全な側面視になってしまう。しかし、その一方で、ヘファイストス神殿、南no.4の片足を前に踏み出すテセウスのポーズに酷似したポーズをもったラピ

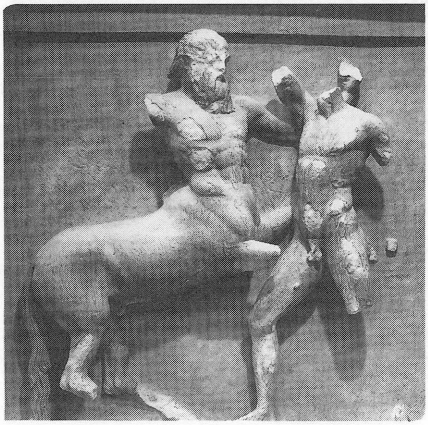


図8　パルテノン南メトープ　no. 32

図7　パルテノン南メトープ　no. 9

タイ人がパルテノンの南no.32（図8）に鏡像となって現われたり、左脚を別にすれば、まさに同じ作家の手に成ったといってもいいような上半身をもつ彫像が登場したりしている（no.26　図9）。ただ、総体的にいえることは、我々の様式論の常識からいっても、平面性・側面性から七分三分視への展開が様式の流れではないかと考える。しかしながら、そのような流れが複数あった場合には非常に事は錯綜してくる。前五世紀中葉のアテナイはまさにそのような時代だったのかもしれない。そうした様式論の詳細は「研究ノート」の範囲を越えてしまう。

以上、述べてきたことは一筋の糸の端緒を見い出し、それを辿ったに過ぎない。問はまた元に還る、「パルテノン・メトープは、その古様であるという点はどうしても払拭できないものの、本当に神殿の建造開始の年、前四四七年以前に制作された可能性があるのであろうか。」パルテノンの造営に関する碑銘断片が語る事実をどう処理すればよいのか[W. B. Dinsmoor ; Attic building accounts, AJA XVII, pp. 53−80 (1913) : AJA XXV, pp. 234−247 (1925)]——

第一年目（前四四七／六年）(A)「アルコン・ティマルキデス、エピスタタイの副書記官・アフィドナの・・・・・ヘレノタミアイの書記官・パイオニダイのディオドロス、パルテノンがイクティノスとカッリクラテスを建築家と

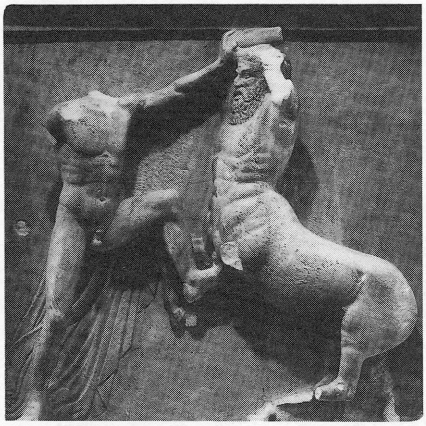


図9　パルテノン南メトープ　no. 26

して開始される。」（一九一三年）

(B)「アルコン・ティマルキデス、ヘレノタミアイの書記官・パイオニダイのディオドロス、パルテノンがイクティノスとカッリクラテスを建築家として開始される。有名な黄金スタテーレスは既に金庫にあり、そこに一五年間保管された。支払が、大理石の切り出しと運搬に対して（大理石の作業はまだ行われていなかったが）、大工と労働者の賃金に対して、そしてエピスタタイ、建築家、および書記官の給料に対して、なされた。」（一九二五年の修正）

ここに記録されたカッリクラテスをどう解釈するのか。また、出来上がって、再利用すべく、そこに置かれていたはずの「第一パルテノン」ないし「キモンのパルテノン」の廃材は会計記録の対象とはならなかったとでもいうのであろうか。

筆者はパルテノン研究には、いわば影の様に寄り添っているヘファイストス神殿の存在が不可欠であると考えている者である。今回はメトープだけを扱ったが、さらに錯綜してはいるが、もっと重要な問題を抱えているのがフリーズである。いずれフリーズを中心としたパルテノンとヘファイストス神殿の相互関係を論じてみたい。また、現在、筆者は学芸大学の水田徹氏を研究代表者とする平成六年から八年までの科学研究費を受け、仲間と共に研究課題である「パルテノン神殿の造営目的に関する美術実地調査」の報告書を作成中である。この「パルテノン研究ノート」は全く私的なものではあるが、平成七年の実地調査(Parthenon-project Japan 1995)に多大の恩恵を受けている。水田徹氏をはじめ、篠塚千恵子、長田年弘、金子亨、中村明人、諸氏に心からお礼申し上げたい。